

氏名	鷲 森 浩 幸
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第3625号
学位授与年月日	平成11年 3 月24日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当者
学 位 論 文 名	日本古代における大土地所有の性格と様相
論文審査委員	主 査 教 授 栄原永遠男 副主査 教 授 広川 禎秀 副主査 教 授 増田 繁夫

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、まず「序章 問題の所在と本稿の構成」で、日本古代における大土地所有である令制以前の屯倉・田荘、八世紀中葉から九世紀のいわゆる初期荘園、一〇世紀以後の荘園のうち、前二者を対象とし、その実態を具体的に明らかにすることを通じて、令制以前から八、九世紀までの大土地所有を、一貫した視点で把握することを目的としている、とする。

「第一部 王家の大土地所有の性格と様相」は、全体として王家の大土地所有を対象としている。まず「第一章 屯倉の存在形態とその管理」では、屯倉とは、あらかじめ設定した領域を、その内部の諸条件により、さまざまな方法で用益するものであり、水田だけでなく、園・野・牧・水域などの多様な用益地の集合体であるとする。

「第二章 八世紀の王家の家産」では、王家は、八世紀でも膨大な所領を有したことを明らかにし、その管理は、後宮の中心的人物と彼女と特別な関係のある議政官（中納言以上）が共同して行ったとする。

「第三章 園の立地とその性格」では、史料に散見する王家・貴族・寺院の所領としての園が、河川沿いの低湿地を開発して用益する大土地所有の一形態であることを明らかにしている。

「第四章 八世紀の流通経済と王権」では、流通・交通の結節点である難波と勢多に難波宮と保良宮が設けられたことに着目し、これらの宮は、中央政府の諸官司に流通経済との接点を与えるという機能を果たしていたことを指摘している。

以上の各章の個別的な考察をもとに、五～九世紀の王家の大土地所有を総体的に考察したのが「第五章 古代における王家と大土地所有」で、第一部の総括の位置にある。

王家の所領は、大王（天皇）の地位に付属する供御所領と、王家を構成する諸家に所有され血縁をたどって継承されていく個別王家所領の二種類が存在したが、これは屯倉の時代から律令制下まで同じで、律令時代には内廷系の諸官司の管理する官田などと、離宮を中心とする所領などとして存在した。

「第二部 寺院の大土地所有の性格と様相」では、寺院の大土地所有を考察している。ここでは、意識的に東大寺以外の寺院を中心に検討し、初期荘園概念の相対化を目指している。

「第一章 八世紀における寺院の所領とその認定」では、律令制下の寺院の所領は、勅施入された寺田（不輸租）と、買得・開発などで獲得された寺領墾田（輸租）の二種類からなることを明らかにしている。従来、初期荘園とされてきたのは後者だけにすぎないので、それをもって当該期の大土地所有の典型とすることは誤りであることを指摘している。

「第二章 法隆寺の所領」「第三章 大安寺の所領」は、資財帳の記載をもとに、法隆寺・大安寺の所領を検討したものである。両寺の所領群の所在地やその存在形態を検討した結果、水田・園・池・山林岳嶋などが特定の地域に集中することが確認でき、屯倉のあり方と共通することが明らかになった。また、両

寺の寺田は律令制の前後、継続して存在したが、墾田は八世紀の開発によるものが存在した、とする。

「第四章 摂津・河内郡猪名所地図」は、同地図の史料的价值を検討したもので、八世紀中葉の東大寺への施入時に作成された文図を基本とし、加筆によるその後の地図の変貌を解明した上で、それがこの所領の展開とが深い関連を有することを明らかにしている。

「付論一 『播磨国風土記』にみえる枚方里の開発伝承」は、法隆寺の寺田から鵜荘となった播磨国揖保郡の所領が、もとは屯倉であったことを指摘している。

「付論二 八世紀前半の法隆寺の寺田」は、資財帳の記載の矛盾が法隆寺による所領維持のための作為であることを明らかにし、それを通じて、資財帳作成の時期（八世紀半ば）の法隆寺の立場を検討する。

「付論三 文図について」は、史料に時折見える「文図」について検討し、これが、文章と図からなる所領関係の文書であることを明らかにしている。

以上の第一部、第二部の王家・寺院の所領の考察から、令制以前の所領が、律令制下にも継続する側面が強く認められることが明らかになった、とする。このような諸所領こそ、五～九世紀の大土地所有の中心と位置づけられるべきであるとする。また、これを視野に入れてこなかった初期荘園論は大きな誤りを犯していると指摘している。また、古代の大土地所有は、一〇世紀以降大きな変化をこうむるとする。律令制以前から続く人頭支配のいきづまりによって、一〇世紀ごろから、土地を軸とする支配・課税に転換されることが、その背景にあると考えられる、とする。

論文審査の結果の要旨

日本古代における大土地所有の研究は、かつては、国家的土地所有との関係、大土地所有の私的な要素の評価など、その歴史的な性格をめぐる議論されたが、論議されつくした観があり、その後長期にわたる停滞に陥っていた。しかし、最近にいたって、ようやく復活のきざしが見えつつある。本論文は、その新しい動向をリードする研究であるといえる。

日本古代における大土地所有の研究は、これまで令制前の屯倉・田荘、八世紀中葉～九世紀のいわゆる初期荘園、一〇世紀以後の荘園を対象として進められてきた。本論文は、このうち前二者を対象とする。

しかし、この両者に関する従来の研究には、大きな問題があった。すなわち、両者は相互に無関係に研究されており、大土地所有としての実態が具体的に明らかにされておらず、初期荘園は、その一部にすぎない東大寺領北陸荘園の研究で事実上代表されてきたため、全体像が把握できていない、などである。

本論文は、このような研究史の現状を克服することをめざして、まず屯倉や王家の所領などの個別の大土地所有について、その所在地や存在形態を明らかにし、その実態の解明を進め、つぎに東大寺領以外の初期荘園を取りあげて、初期荘園の全体的把握に努めている。そして、令制以前から八、九世紀までの大土地所有を、一貫した視点で把握することを全体的な目的としている。このように、本論文は、日本古代の大土地所有研究の新局面を切り開く意欲作である。まずこの点を評価した上で、審査結果を述べる。

「序章 問題の所在と本稿の構成」で、上記の研究史の現状と本論文の意図を述べたあと、「第一部 王家の大土地所有の性格と様相」では、律令制以前から九世紀までの王家の所領が対象とされる。「第一章 屯倉の存在形態とその管理」は新稿で、茨田屯倉・栗隈屯倉・茅渚山屯倉を取り上げ、屯倉とは、まず一定の領域を占有し、その後、その内部を土地条件に応じてさまざまに用益するものであることを示した。これは、屯倉に関する新しい見方を提示したものとして注目される。

「第二章 八世紀の王家の家産」では、八世紀の王家所領を個別具体的に追求した結果、膨大な所領を持っていたことを示し、その管理は、後宮の中心人物と彼女と結びつく議定官が共同で行ったことを指摘している。これは、八世紀の王家の家産の内容を、その管理もふくめて、始めて具体的に明らかにしたもののといえる。

新稿の「第三章 園の立地とその性格」は、史料に見える園を取り上げ、これが河川下流域の低湿地を用益するもので、王家・貴族・寺院の大土地所有の一部たることを解明した。大土地所有としての園については、これまで正面から検討した研究はなく、大土地所有の新たな側面を提示したものと評価できる。

「第四章 八世紀の流通経済と王権」は、大土地所有そのものを対象とするものではなく、その上に展開する流通経済における難波と勢多の位置を明らかにしたものである。これまで両地の研究は多いが、宮に注目し、各官司は宮の存在を前提として始めて流通経路に接触し得たことを指摘した点が新しい。

「第五章 古代における王家と大土地所有」は、以上の第一部の総括である。屯倉から八世紀の王家所領までを見渡すと、王家の大土地所有は、大王・天皇の地位に付属する供御所領と、王家を構成する個々の諸家が所有し、血縁をたどって継承される個別王家所領に二分することができ、この両者は律令制下においても、内廷系の諸官司が管理する官田などと離宮を中心とする所領として、形を変えつつも基本的に維持されていくとする。これによって、王家の大土地所有の全体的な構造と、その継続性が明らかにされた点は、大きな成果である。

「第二部 寺院の大土地所有の性格と様相」では、従来の初期荘園研究を相対化する意図を込めて、東大寺以外の大寺院の所領を研究対象としている。

「第一章 八世紀における寺院の所領とその認定」では、寺院の所領が、勅施入の寺田（不輸租）と、買得・開発などで集積される寺領墾田（輸租）の二種類からなり、いわゆる初期荘園は後者にあたることを指摘する。これによって、寺院の大土地所有を全体として把握する道が開かれ、従来の初期荘園研究のかたよりが明らかにされた意義は大きい。

「第二章 法隆寺の所領」「第三章 大安寺の所領」はともに新稿で、以上の点を、東大寺以外の二つの寺で検証したものである。資財帳の巧みな分析を通じて、両寺の所領の存在形態が屯倉と共通すること、律令制の導入前後に継続して存在することを指摘する。これによって、寺院の大土地所有の実態が、かなり具体的にイメージできるようになった。

「第四章 摂津職河辺郡猪名所地図」は、東大寺の大土地所有に関する地図の史料的考察で、地図への加筆が大土地所有の進展と深く関連することを解明したもので、その分析はあざやかである。

「付論一 『播磨国風土記』にみえる枚方里の開発伝承」は、法隆寺の鰯荘として存続する播磨国揖保郡の所領が、もとは屯倉であったことを示したもので、寺田の源流を探る試みである。「付論二 八世紀前半の法隆寺の寺田」は、資財帳の作為を検討し、法隆寺の立場を推測したもの。研究の乏しい八世紀の法隆寺の実状が明らかにされていて興味深い。「付論三 文図について」は、史料に散見する「文図」なるものが、文と図からなる所領関係の文書であることを明らかにした好短編である。

「終章 要約と展望」では、王家・寺院の所領とも、五～九世紀にかけて継続面が強く認められることを強調し、この点を中心に大土地所有論を再構築すべきことを主張している。また、かかる古代的な大土地所有は、律令以前から九世紀まで続く人頭支配から、一〇世紀以降、支配の基本が土地に置かれるようになることで、本質的な変質を遂げるという見通しを提示している。いずれも、従来の大土地所有論に根本的見直しを迫る主張といえよう。

以上のように、本論文は、日本古代史の根本問題の一つである大土地所有論に真正面から取り組み、新たな展望を切り開くことに成功しているといえる。今後の大土地所有研究をリードする成果と評価することができよう。所領の現地比定などで、やや強引なところがあるが、大局的には齟齬がない。また、貴族の大土地所有の解明が課題として残されており、今後のさらなる検討が望まれるが、史料的な困難さから、現段階ではある程度はやむをえない。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。